

入所から在宅復帰し、通所・訪問を利用して在宅生活を継続している症例

介護老人保健施設 サルビア
リハビリテーション室
理学療法士 宮原 一馬 (通所)
作業療法士 竹沢 美香 (入所・訪問)

利用者様情報

氏名：A様（女性・82才） **性格**：明るく穏やか

疾患：右アテローム性血栓性脳梗塞(2020年9月)

既往歴：難聴、右アテローム性血栓性脳梗塞(2019年)

※2019年の脳梗塞発症後は後遺症なく、
福祉サービス等利用せずADL自立していた。

介護度：要介護5（以前は要支援1）

家族：夫と二人暮らし(夫：非常に協力的)

自宅：団地 3階（EVなし、階段に手すりあり）

趣味：作業活動、カラオケ、老人会のサークル、家事

身体・ADL状況（退所時：令和3年5月～）

麻痺：左腕・足（軽度の運動麻痺残存）

高次脳機能障害：注意障害（多弁・注意散漫）

見当識障害（HDS-R：20/30点）、記憶障害、妄想

基本動作：見守り（朝方は軽介助必要）

移動：T字杖 見守り（左すり足による躓きあり）

階段昇降：手すり使用して見守りレベル

食事・整容・更衣：見守り～自立（準備必要・動作はゆっくり）

トイレ：一部介助（パッド交換困難、下衣操作は可能）

服薬管理：全介助（自己管理困難）

入所後の身体機能評価でリハビリ合宿対象者へ

○B病院よりサルビアへ入所（令和3年1月中旬旬）

理由：生活動作全般に介助が必要、高次脳機能障害が残存
⇒高齡の夫に介護が難しいと思われた

○サルビアへ入所後、身体機能評価と予後予測

- ・身体機能面：歩行見守りレベルまで向上が見込めると予測
- ・高次脳機能面：サービスを入れることで在宅生活が援助できるのではないかと予測
- ・本人の在宅復帰希望とリハビリに対する理解・意欲があった
⇒リハビリ合宿なら在宅復帰ができるのではと評価

頻度・介入時間：週5回、40～60分（1月下旬～5月上旬、4カ月弱）

内容：機能訓練、歩行訓練、生活動作訓練、等

動画

退所前に提案したサービスと目的

- ①通所リハビリ：入浴の為、リハビリ目的、夫のレスパイト
- ②訪問リハビリ：家族への介護指導、サービスの提案、環境調整
リハビリ目的
- ③ショートステイ：本人・夫のレスパイト

⇒すべてのサービスがサルビアで行えることも説明

退所前の環境調整と介護指導

○環境調整

実施したこと

- ・ 玄関・廊下等に手すりの追加
- ・ ベッドの位置の変更
- ・ 床センサー設置（夫の希望）

実施しなかったこと

- ・ ベッド横に置き型手すりの設置
- ・ ベッド柵の設置
- ・ ベッドマットの高さ調整

○介護指導

- ・ 書面でADL状況・介助方法を説明・伝達
- ・ 動画をみてもらう

⇒5月上旬に在宅復帰へ

退所直後の様子・訪問リハでの対応（令和3年5月上旬）

○朝方にベッドからの転倒が多い

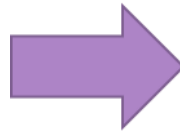
- ⇒寝起きの混乱、朝方の体の動き難さ、ベッド環境、環境変化が原因と思われた
対応：置き型手すりの設置を再提案
 ベッドマットの高さ変更を再提案
 転倒時の介助方法を直接指導

○夫から介護について不安感の訴え

- ⇒初めての介護で、感染症の影響で施設から退所前の直接の指導が難しかった
対応：その都度不安・疑問点を傾聴・確認
 移動・転倒時等の介助方法を指導

環境調整後

- 朝方の転倒がなくなった
- ベッドからの起立・着座がスムーズになり夫の介助が楽になった
- 夫が自信を持ち始め、積極的に自宅内を改装し始める



通所リハビリとの連携

○送迎方法の確認・伝達

- ・入所スタッフが退所時訪問等で自宅の様子と身体機能を把握している為、事前に送迎方法を通所スタッフに伝達することが可能
- ・実際の送迎方法について再確認
- ・途中で身体機能に変化があった場合、訪問で送迎方法を確認し、通所スタッフに再度伝達

○通所・訪問利用時の様子を情報交換

- ・通所リハビリスタッフと適宜利用状況を報告しあう

ショートの利用を開始するまで

- ・夜間はベッドセンサーを使用し、鳴ればすぐに起きて対応
(週2~3回程、朝4~5時頃鳴ることも)
- ・通所の日(水・土)以外はつきっきりで介護
⇒夫の疲労が心配された
⇒ショートステイについて説明し、利用を勧める



「頑張ります！」
「まだもうちょっと！」

⇒5月末に夫が体調を崩し、緊急ショートへ


その後

- ・ 月1回のショートステイ（4～7日間）の利用を開始
- ・ 6月末から通所を週4回に増やし、訪問リハビリを週1回に変更

○6月以降

- ・ 転倒等ケガ無く、在宅生活を継続できている
- ・ 洗濯物を畳む、料理を手伝う等の役割ができた
- ・ 在宅生活に慣れ、本人の自由度が向上することに伴い、コミュニケーションにすれ違いが生じて夫の疲労が少しずつ増えてきた

⇒ ショートの日数延長や再入所について提案中



通所

初回介入

- 令和3年5月に通所開始
 - 施設内は杖使用し腋窩介助
 - 左足の突っかかりが顕著
 - 話に夢中になると転倒リスク高くなる
 - 家に戻ったばかりで不安感がある
-
- 在宅生活に慣れていく

リハビリ内容とデイでの生活

- ストレッチ…体幹や骨盤、手・足中心に
 - 筋力練習…腹筋やおしりや足中心に
 - 立位練習…手を伸ばしてバランスをとる、ステップ練習等
 - 歩行練習…総距離150m
-
- 同席の方との談笑
 - 職員とのレクリエーションへの参加
 - 手作業

2ヶ月後

- 家での役割（食材の皮むき、タオルたたみ等）ができた
 - 在宅生活に慣れてきた
 - 左足の突っかかりが軽減して施設内は付き添いで移動可能
 - 注意力が散漫なところは変わらない
-
- 訪問リハと連携して家での役割ができて、突っかかり無く転倒しないようにリハビリ介入していく。

ご清聴ありがとうございました。

